

親密な関係における暴力の責任帰属にかかわる 要因の検討

— 道徳性と支配性と恋愛様相 —

森永康子・坂田桐子¹・平川 真
(2016年10月6日受理)

Effects of Morality, Dominance, and Relational Maturity on Perception of Intimate Partner Violence

Yasuko Morinaga, Kiriko Sakata¹ and Makoto Hirakawa

Abstract: The effects of morality, social dominance orientation, and relational maturity on perception of intimate partner violence (IPV) were investigated in a sample of 300 Japanese male in their 30s. After reading a description of an IPV scenario involving a hypothetical couple, participants responded to items of victim (i.e., wife) blame. We expected that men with higher self-rated morality, higher social dominance orientation and less mature relationships with their own partners would show the highest victim blame. However, we found that men who rated themselves as having high morality blamed the victim more than those who did not, regardless of their dominance orientation and relational maturity. The results suggested that morality might play an important role in IPV.

Key words: intimate partner violence, morality, social dominance orientation, relational maturity

キーワード：親密な関係における暴力、道徳性、社会的支配志向性、恋愛様相

親密な関係における暴力 (IPV: intimate partner violence) に関する研究は、日本でも近年盛んに行われるようになってきた。その中でも、社会心理学の視点から行われている研究には、IPVの被害経験や加害経験と、自尊心や性別役割態度といった個人の特性や態度、またパートナーとの関係がどのように関わっているかなどが検討されてきた (e.g., 赤澤・井ノ崎・上野・松並・青野, 2011; 深澤・西田・浦, 2003; 森永・Frieze・青野・葛西・Li, 2011)。また、実際の被害経験や加害経験ではなく、IPVの場面を描いたシナリオを提示し、被害者にどのくらい責任を帰属するか

について尋ねたものもある (e.g., Nguyen et al., 2013; Yamawaki, Ostenson, & Brown, 2009)。海外を含め、これまでのIPV研究から、IPVの容認や加害に関連する要因として、性別役割態度、好意的性差別態度、両親の喧嘩の目撃などが報告されてきた (e.g., 赤澤, 2015; Frieze, 2005)。

ところで、IPV加害者は自分のことを暴力的な人間だと認知しているのであろうか。少なくとも本人は自分のことを好意的に評価している可能性がある。たとえば、Vecinaらは、IPV加害により有罪になった男性が比較対象となった心理学者よりも、自分の道徳観が絶対的に正しいと考えていること (Vecina, Chaón, & Pérez-Viejo, 2015) や道徳基盤尺度 (Graham, Haidt,

¹広島大学大学院総合科学研究科

& Nosek, 2009) で測定される道徳性を重視していること (Vecina, 2014) を見いだした。こうしたことから, Vecina, Marzana, & Paruzel-Czachura (2015) は, 高い自尊心が時としてネガティブな結果をもたらすように, 道徳性が高いことがパートナーに対する暴力につながるのではないかと主張している。過去の社会的に望ましい行動つまり道徳的に良い行動のせいで, その後に望ましくない行動つまり道徳的でない行動をとっても気にならないという現象は道徳的ライセンス (moral licensing; Miller & Effron, 2010) と呼ばれる。同様に, 自分自身を道徳的な人間だと認知している人は, パートナーに暴力をふるうことに抵抗がないのかもしれない。

また, IPVにつながる可能性のある個人の態度として, 本研究では支配性をとりあげる。フェミニズム理論では, 女性に対する男性の性暴力は支配性の現れであると語られてきた。心理学の研究においても, パートナーを支配しようとする傾向が IPV と関連することが示されている (e.g., Karakurt & Cumbie, 2012; Straus, 2008)。しかしながら, これらの研究は, 特定のパートナーとの支配-服従関係を検討したものであり, そこで扱われている権威や制限, 軽蔑 (Hamby, 1996; Karakurt & Cumbie, 2012) といったものは, 精神的暴力の一種とも見なせるのではないだろうか。また, IPV の結果として支配-服従関係が生まれた可能性もある。そこで, 本研究では支配性として集団間の不平等を志向する程度である社会的支配志向性 (SDO: Social Dominance Orientation; Pratto, Sidanius, Stallwarth, & Malle, 1994) をとりあげる。これは, 所属する集団に応じて処遇が異なることは道理にかなうとする思想や信条であり, 内集団や外集団に対する態度ではなく, 広く集団間関係一般にかかわるものとされている (池上, 2012)。IPV の背後には, 個人がもともと持っていた集団間格差についての態度があるのではないだろうか。なぜなら, 集団間の格差を当然とする態度は, 集団としての男性と女性の間にある格差をも当然とする態度と関連していることが考えられるからである。そこで, 本研究では集団間関係としての支配性が IPV とどのように関連するかについて検討する。

以上のように, 自分の道徳性を高く認知し, さらに集団間の格差を当然と思っているような人は, IPV の加害者になりやすいのではないかと考えられる。そして, IPV が表面化するきっかけにパートナーとの関係があるのではないだろうか。本研究で検討する3番目の要因はパートナーとの関係であり, これについては恋愛様相モデル (高坂, 2011) をとりあげた。従来の

IPV 研究では, たとえば, ラブ・スタイル理論 (Lee, 1977) をもとに, Ludus や Mania などのスタイルが IPV とどのように関連するかといったことが検討されてきた (e.g., 赤澤ら, 2011)。しかし, ラブ・スタイルは恋愛観とも言える (高坂・小塩, 2015) ため, 本研究では実際にパートナーとどのような関係にあるかについて恋愛様相モデルをもとに検討する。このモデルは, 「恋」の特徴である相対性, 所有性, 埋没性, 「愛」の特徴である絶対性, 開放性, 飛躍性をそれぞれ両極とする3次元上に, 個人が認知する恋愛関係を位置づけるものである。3つの次元のおおまかな内容は, 以下の通りである。相対性-絶対性の次元は, パートナーを他者と比較し評価するか vs. 欠点や短所を超えてパートナーを受容するか, 所有性-開放性の次元は, パートナーのエネルギーを占有するか vs. 自分のエネルギーを分け与えるか, 埋没性-飛躍性の次元は, パートナーが生活・意識の中心となっているか vs. パートナーを基盤として発展するか。関係がより親密になるほど, 「愛 (絶対性, 開放性, 飛躍性)」の方向に進むことが想定されている (高坂・小塩, 2015)。パートナーとの関係が「恋」の方向にある人の方が, 「愛」の方向にある人よりも, パートナーとの関係で不満を生じやすく, その結果, IPV を引き起こしやすいのではないだろうか。

以上のように, 本研究では, 道徳性と支配性そしてパートナーとの関係によって, IPV に対する認識がどのように異なるかについて検討する。なお, 検討の際には, 答えやすさという点から, IPV シナリオの責任帰属を用いる。IPV 加害者になる可能性のある人は, 他者がその人のパートナーに振るう暴力に対しても寛容になり, 被害者への責任帰属を行うようになるのではないかと考えた。また, IPV は女性も加害者になることが報告されている (e.g., 森永ら, 2011; Straus, 2010) が, 本研究では, IPV 加害者になることが多い男性 (内閣府男女共同参画局, 2015参照) を対象として検討を行う。自分のことを道徳性が高いと認知し, 支配志向性が高い男性において, パートナーとの関係が恋に近い場合に IPV を容認する傾向つまり IPV 被害者への責任帰属が高くなることが予測される。

方 法

参加者 30代男性300名。既婚者119名 (39.7%)。リサーチ会社を通じてウェブ調査を行った。2016年4月に実施。

質問項目 1. 道徳性の認知 (道徳自認) 自分の道徳性の高さをどのように認知しているかを尋ねるために,

Table 1 各変数の記述統計 (相関係数, 平均値, SD, α)

	責任帰属	道徳自認	集団支配	平等主義	相対-絶対	所有-開放	埋没-飛躍
責任帰属	.818						
道徳自認	.192 **	--					
集団支配	.071	.138 *	.847				
平等主義	-.005	.031	-.181 **	.854			
相対-絶対	-.087	.031	.090	.121 *	.812		
所有-開放	-.163 **	.080	.005	.076	.298 **	.806	
埋没-飛躍	-.099 †	.067	.100 †	.100 †	.500 **	.500 **	.657
平均値	2.220	2.640	2.735	2.893	2.744	2.867	2.859
標準偏差	0.634	0.769	0.635	0.586	0.495	0.489	0.463

すべて4件法 ** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$. 対角線上は α 係数

「私は道徳的な人間だ」という1項目を用いた。4件法(当てはまらない-当てはまる)。

2. 支配性 社会的支配志向性尺度(杉浦・坂田・清水, 2014)を構成する集団支配志向性(以下, 集団支配)と平等主義志向性(以下, 平等主義)のそれぞれから5項目を使用した。4件法。確認的因子分析の結果, 許容範囲の適合度が得られた(CFI = .933, RMSEA = .093, α 係数はTable 1参照, 因子間相関 $r = -.260$)ので, それぞれの因子に負荷する項目の平均値を尺度得点とした。得点が高い方が当てはまる度合いが高いことを意味する。

3. パートナーとの関係 現在のパートナーまたは一番最近交際していたパートナー, もしくは好意をもっている相手との関係について, 恋愛様相尺度(高坂・小塩, 2015)をもとに質問項目を作成した。相対性-絶対性(以下, 絶対性), 所有性-開放性(以下, 開放性), 埋没性-飛躍性(以下, 飛躍性)の3つの下位尺度を合わせて14項目を用いた。4件法。確認的因子分析の結果, 許容範囲の適合度が得られた(CFI = .919, RMSEA = .069, 因子間相関は絶対性と開放性 $r = .373$, 絶対性と飛躍性 $r = .683$, 開放性と飛躍性 $r = .638$)ので, 3つの下位尺度を用いて検討する。なお,

各下位尺度の得点は, それぞれの因子に負荷する項目の平均値をあてた。

4. 責任帰属 夫妻間のIPVシナリオ(Yamawaki et al., 2009をもとに作成。付録参照)を用い, 被害者である妻の責任の程度を尋ねた。「この出来事に関して, 妻にもいくらか悪いところがあった」「この状況が生じた責任は, 妻にもいくらかある」などの8項目(4件法: 1.同意しない-4.同意する)を用いたが, 分析には α がもっとも高い値を示した5項目を使用した。得点が高い方が妻への責任帰属が高い。

5. その他 以上の質問の他に, 婚姻状態や年齢などへの回答を求めた。

結果

各変数の平均値と標準偏差及び変数間の相関係数をTable 1に示した。妻への責任帰属得点を目的変数, 婚姻状態を統制変数とし, 道徳自認, 集団支配と平等主義のそれぞれ, 恋愛様相, さらにそれらの交互作用項を説明変数とする重回帰分析を行った。恋愛様相に3つの下位尺度があり, それぞれについて分析したため, 重回帰分析は6回実施したことになる。支配

Table 2 重回帰分析結果 (集団支配)

使用した恋愛様相尺度	相対-絶対性	所有-開放性	埋没-飛躍性
結婚状態(1:独身, 2:既婚)	-.136 *	-.111 *	-.119 *
道徳自認	.196 **	.199 **	.193 **
集団支配	.028	.039	.044
恋愛様相	-.078	-.166 **	-.105 +
道徳自認×集団支配	-.032	-.026	-.068
支配×恋愛様相	.153 *	.021	.224 **
道徳自認×恋愛様相	-.053	.051	-.039
道徳×支配×恋愛様相	-.024	.021	.025
R^2	.094 **	.088 **	.111 **

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

Table 3 重回帰分析結果 (平等主義)

使用した恋愛様相尺度	相対-絶対性	所有-開放性	埋没-飛躍性
結婚状態(1:独身, 2:既婚)	-.134 *	-.108 †	-.124 *
道徳自認	.214 **	.230 **	.225 **
平等主義	.015	.019	.031
恋愛様相	-.057	-.156 **	-.080
道徳自認×平等主義	.070	.054	.039
平等×恋愛様相	.021	.101 †	.053
道徳自認×恋愛様相	-.072	.039	-.006
道徳×平等×恋愛様相	-.116 †	-.122 *	-.134 *
R^2	.080 **	.107 **	.088 **

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

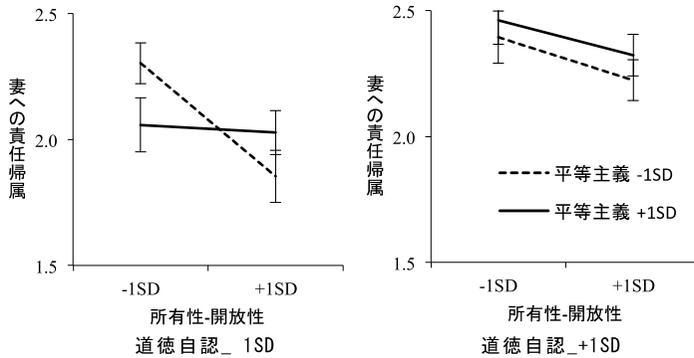


Figure 1. 道徳性×平等主義×恋愛様相の交互作用

性の指標として集団支配を用いたときの結果を Table 2, 平等主義を用いたときの結果を Table 3 に示した。いずれの分析においても、道徳自認と責任帰属が有意に関連しており、自分を道徳的だと思っている人ほど、妻に責任帰属をしていた。

3 要因交互作用については、集団支配を用いた場合には有意ではなく、平等主義を用いた場合には開放性と飛躍性が有意であった。この 3 要因交互作用について下位検定を行ったところ、いずれも道徳自認の低い場合に平等主義と各恋愛様相の単純交互作用が有意であった (開放性 $\beta = .189, p = .011$; 飛躍性 $\beta = .139, p = .038$)。さらに、有意な単純交互作用について、単純単純主効果を検討した結果、平等主義が低い場合に恋愛様相の効果が有意であった (開放性 $\beta = -.356, p < .000$; 飛躍性 $\beta = -.181, p = .045$)。開放性の結果を Figure 1 に示した。なお、飛躍性はほぼ同様のパターンであった。

考 察

本研究は、道徳性 (道徳自認) と支配性に恋愛様相が加わることで、IPV を容認する、つまり IPV の被害者に責任を負わせるようになるのではないかという仮説について、男性を対象に検討した。その結果、いずれの分析においても道徳自認の主効果が有意であり、自分を道徳的な人間だと思っている男性は IPV の被害者に責任を負わせる傾向がみられた。これは、Vecina ら (Vecina, 2014; Vecina et al., 2015) の結果を支持するものであった。しかし、本研究では、道徳性の高さだけでなく、支配性の高さやパートナーとの関係が加わることで、暴力容認が高まるだろうと予測したが、そのような結果は得られなかった。本研究で用いたシナリオが、被害者である妻が子どもを放って遊んでいたように描かれているため、妻の役割を放棄

していたと解釈され、自分を道徳的だと思っている人にとっては、罰を与えられても当然だと感じられたのかもしれない。そのため、道徳自認の高い人たちの責任帰属には、支配性やパートナーとの関係が影響しなかったとも考えられる。

一方、自分のことを道徳的だと思っていない場合には、平等主義志向の効果がみられ、平等主義が高い場合には、恋愛様相にかかわらず、妻への責任帰属があまりなされていなかった。本研究で扱った平等主義志向は、集団間の平等な関係に対する志向性であり、性別に基づく集団を明確に示すものでない。しかし、一般に集団間の平等を志向する者は集団としての女性と男性にも平等な関係を志向していると解釈できよう。そのために、妻に責任をあまり帰属しなかったのかもしれない。

しかし、道徳自認が低く、さらに、平等主義志向が低い場合には、恋愛様相の効果がみられた。道徳自認が低いことで、道徳性のもつライセンスに似た機能は働かないだろうが、集団間の平等を否定することで、もしパートナーとの関係が「恋」に近いものであれば、相手よりも上の立場でいようと、暴力を容認するようになるのかもしれない。

以上のように、本研究の仮説は支持されなかったものの、自分は道徳的だと思っている男性は IPV を容認する傾向をもつという結果が得られ、日本の IPV 研究に新しい知見を加えたのではないかと考えられる。今後は、道徳性や支配性、さらに IPV の指標を吟味し、本研究の仮説や結果について再度検討することが必要であろう。特に、道徳性については「私は道徳的な人間だ」という 1 項目で測定しており、信頼性に欠けるかもしれないため、複数の項目を用いることが必要であろう。また、本研究は、既婚男性と独身男性の両方を対象としたものであった。さらに、現在のパートナーの有無については尋ねておらず、一部の回

答者は理想的な恋愛関係を答えた可能性もある。したがって、今後は女性を対象としたり、パートナーの有無やその交際期間などを考慮して検討する必要がある。

【引用文献】

赤澤淳子 (2015). 親密な二者関係のダークサイドとしてのデートDV 発達心理学研究, 26(4), 288-299.

赤澤淳子・井ノ崎敦子・上野淳子・松並知子・青野篤子 (2011). 衡平性の認知とデートDVとの関連 恋愛大学研究紀要：人間学部篇, 10, 11-23.

深澤優子・西田公昭・浦光博 (2003). 親密な関係における暴力の分類と促進要因の検討 対人社会心理学研究, 3, 85-92.

Frieze, I. H. (2005). *Hurting the one you love: Violence in relationships*. Belmont, CA: Thomson.

Graham, J., Haidt, J., & Nosek, B. A. (2009). Liberals and conservatives rely on different sets of moral foundations. *Journal of Personality and Social Psychology, 96*(5), 1029-1046.

Hamby, S. L. (1996). The dominance scale: Preliminary psychometric properties. *Violence and Victims, 11*(3), 199-212.

池上知子 (2012). 格差と序列の心理学：平等主義のパラドクス ミネルヴァ書房

Karakurt, G., & Cumbie, T. (2012). The relationship between egalitarianism, dominance, and violence in intimate relationships. *Journal of Family Violence, 27*(2), 115-122.

高坂康雅 (2011). 青年期における恋愛様相モデルの構築 和光大学現代人間学部紀要, 4, 79-89.

高坂康雅・小塩真司 (2015). 恋愛様相尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 発達心理学研究, 26(3), 225-236.

Lee, J. A. (1977). A typology of styles of loving. *Personality and Social Psychology Bulletin, 3*(2), 173-182.

Miller, D. T., & Effron, D. A. (2010). Chapter three- psychological license: When it is needed and how it functions. *Advances in Experimental Social Psychology, 43*, 115-155.

森永康子・Frieze, I.H.・青野篤子・葛西真記子・Li, M. (2011). 男女大学生の親密な関係における暴力 女性学評論, 25, 219-236.

内閣府男女共同参画局 (2015). 男女間における暴力に関する調査報告書概要版 Retrieved from http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/pdf/h26danjokan-gaiyo.pdf (2016年9月20日)

Nguyen, T. T., Morinaga, Y., Frieze, I. H., Cheng, J., Li, M., Doi, A., ... & Li, C. (2013). College students' perceptions of intimate partner violence: A comparative study of Japan, China, and the United States. *International Journal of Conflict and Violence, 7*(2), 262-273.

Pratto, F., Sidanius, J., Stallworth, L. M., & Malle, B. F. (1994). Social dominance orientation: A personality variable predicting social and political attitudes. *Journal of Personality and Social Psychology, 67*(4), 741-763.

Straus, M. A. (2008). Dominance and symmetry in partner violence by male and female university students in 32 nations. *Children and Youth Services Review, 30*(3), 252-275.

Straus, M. A. (2010). Thirty years of denying the evidence on gender symmetry in partner violence: Implications for prevention and treatment. *Partner Abuse, 1*(3), 332-362.

杉浦仁美・坂田桐子・清水裕士 (2014). 集団と個人の地位が社会的支配志向性に及ぼす影響 社会心理学研究, 30(2), 75-85.

Vecina, M. L. (2014). The Five Moral Foundations Sacredness Scale in men in court-mandated treatment for violently abusing their partners. *Personality and Individual Differences, 64*, 46-51.

Vecina, M. L., Chacón, F., & Pérez-Viejo, J. M. (2016). Moral absolutism, self-deception, and moral self-concept in men who commit intimate partner violence: A comparative study with an opposite sample. *Violence Against Women, 22*, 3-16.

Vecina, M. L., Marzana, D., & Paruzel-Czachura, M. (2015). Connections between moral psychology and intimate partner violence: Can IPV be read through moral psychology? *Aggression and Violent Behavior, 22*, 120-127.

Yamawaki, N., Ostenson, J., & Brown, C. R. (2009). The functions of gender role traditionality, ambivalent sexism, injury, and frequency of assault on domestic violence perception: A study between Japanese and American college students. *Violence Against Women, 15*(9), 1126-1142.

【付記】

本研究はJSPS 科研費 JP263808440の助成を受けた。

なお、本研究の分析にはHADを用いた。清水裕士(2016). フリーの統計分析ソフトHAD: 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.

【付録】

使用したIPVシナリオ

A男とB子は結婚して4年で、2人の子どもがいま

す。A男は家族を支えるために一生懸命働いています。B子は子どもとともに家庭にいます。ある日、B子は友だちと一緒にパーティに出かけ、夜中の1時に戻ってきました。B子が遊んでいる間、A男は子どものめんどうをみて、寝かしつけ、家事を全部片づけました。B子が家に戻ったときには、すでにA男は彼女に対してとても腹を立てていました。彼は、怒りを抑えることができず、彼女を殴ったのです。B子はバランスを崩し、台所の棚で額をうちました。そのせいでB子は、病院の救急治療室で三針縫うことになってしまいました。